

係の成立を可能にする条件なのである。このようにして「覚悟性という本来的な自己存在から、本来的な共相互関係が、初めて生じる」(SZ298) ことになるということが示される。

以上のことから、現存在をどこまでも個別化することによって、他者の人格の比類なさを自覚することから他者の人格を尊重するという態度が生じ、積極的な他者関係が構築されるということを明らかにし、冒頭の Hügli と Han による「愛は『存在と時間』のうちでは不在である」という見解が妥当しないという結論を導く。

註

ハイデッガーの著作からの引用については原則として次の略記号とページ数を引用文の後に付す。

SZ Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1993.

また、それ以外の引用については次の略記号を用いる。

AA 伊藤徹、「他者の不在—ハイデッガーの場合」、(『思想』一九九〇年十二月号)。

HT Anton Hügli/Byung-Chul Han, 「Heideggers Todesanalyse」, (Martin Heidegger, Sein und Zeit, herausgegeben von Thomas Rentsch, Akademie Verlag, 2001).

カントにおける道德と宗教について

——根源悪をめぐる——

華 園 暁

目 次

序	
第一章 道德と宗教	
第一節 道德について	
第二節 道德の帰結	
第二章 善と悪	
第一節 善悪の概念	
第二節 善悪の選択	
第三節 道德的中間物	
第三章 素質と性向	
第一節 道德的自由	
第二節 善への根源的素質	
第三節 悪への性向	
第四節 心情の悪性	
第五節 根源悪	
第四章 悪の根拠	
第一節 生来悪	
第二節 悪の根拠	
第三節 格率の形式	

第四節 他律の自由

第五章 悪の根源

第一節 時間的根源と理性的根源

第二節 主観的普遍的根拠

第三節 叡知的選択行為における乖離

第四節 二つの自由概念

第六章 悪の克服

第一節 悪の克服

第二節 超自然的協力

第三節 心術の革命

第四節 克服の希望

第五節 結び―生来悪

「善い」とされるものがあるのは、「悪い」とされるものがあるからである。そうでなければ「善い」とされるものは単なる「普通」のものである。これらのものは必然的に結びついているのであるが、私は『実践理性批判』と『単なる理性の限界内における宗教』（以下『宗教論』）における道徳的善悪の考察の結びつきも上記のもののように必然的なものと考えている。しかしながら『宗教論』における考察は、その中で展開される「根源悪」(das radikale Böse) という概念のために問題視されがちである。それゆえ本論では主に『人倫の形而上学の基礎づけ』『実践理性批判』と『宗教論』の第一篇「悪の原理が善の原理と並び住むことについて、あるいは人間本性の内なる根源悪について」を手がかりとし、両者の善悪の概念を対比し、カントの哲学体系における根源悪の概念のもつ意義、また道徳と宗

カントにおける道徳と宗教について

教の関係を考察する。

第一章ではカントの考える道徳と宗教について考察する。「道徳自身のためには宗教などをまったく必要とせず、むしろ純粹理性により、道徳だけでやっていけるのである」。しかしながら、道徳は「不可避免的に」宗教へと導かれる。

第二章では『実践理性批判』における道徳法則を通じての善悪の概念と、『宗教論』における善悪の選択の問題、そしてそこにおける道徳的中间物について考察する。

カントは「善や悪は、本来行為にかかわるのであり、人格の感覚状態にかかわるのではない。あるものが端的に(そしてあらゆる点からみて、制約抜きに)善または悪であり、あるいはそうみなされるとすれば、それは行為の素性、意志の格率、したがってまた、善きまたは悪しき人間として行為する人格そのものに関わるもの」であるという。

すなわち、カントは善悪の概念を、人間の感覚状態に関係させるのではなく、人間の行為の仕方に関係させる。そしてこれは、人間の行為の仕方を決める意志の格率が、人間一般に与えられている道徳法則によってアプリアリに規定されているか否かということに善悪の概念を置くのであって、行為によって達成される対象や意志の対象に基づいて善悪の概念を規定したりはしないということである。また、このような善悪の概念は幸不幸からも区別されるものである。第三章では善への根源的素質について、そして悪への性向につい

て考察する。道徳法則は、カントにおける行為の道徳性を基礎づける最高原理である。それはすべての理性的存在者に妥当する客観的原理として、行為の主観的原理である格率から区別される。それゆえ道徳法則はいつでもどこでもいかなる理性的存在者にも妥当する普遍的、かつ必然的な原理である。そして道徳法則は徳とそれに相應する幸福との必然的結合である最高善の促進を要求する。以上のことから『実践理性批判』における「自由」とは「道徳的善をなす自由」であるといえるのである。

人間は人倫的に善であるか、人倫的に悪であるか。『宗教論』において、カントは、人間本性のうちには三つの善への根源的素質があるという。しかしながらカントは一方で「性向」という概念を打ち立てる。そこで心情の悪性が明らかにされ、その悪は「根源的」であるとされる。

第四章では悪の根拠について考察する。カントによれば、悪の根拠は道徳法則と感性的衝動との従属関係という格率の形式に求められる。また、悪しき格率を採用するのは人間の叡知的選択行為なので、責任根拠は行為者である人間自身に帰するものとされ、さらにこれは根絶不可能なものとされる。すなわち「人間が生来悪である」その責任は人間自らの「他律的自由」の行使に求められる。

第五章では悪の根源について考察する。カントによれば悪しき格率を最初に採用する主観的根拠の理性的根源は探求不可能であるという。さらに素質的に善である人間になぜ悪が入り込んだかよくわ

からないという。しかしながら人間は實際悪であり、その悪の根源そのものが我々の責任に帰せられるのは確かであるとする。このようなジレンマはなぜ起こってしまったのか。

第六章では悪の克服について考察する。カントは根源悪について、根絶は不可能だが克服は可能であるとする。そのため人間は心術の革命によって善を受け入れる主体とならなければならないとする。それでも主観的根拠の理性的根源が探求不可能であるため、自らが善き人間であるという確信には到達できない。それゆえ絶え間ない努力を重ねつつその過程において道徳宗教の協力をえて、根源悪の克服を希望できるという結論に至る。

本論ではこのような考察を経て、道徳と宗教のかかわり、すなわち宗教は道徳の帰結であるという過程と、根源悪の克服の過程の両方において、カント自身の哲学的姿勢に何ら異なることが無いことを主張し、カントの哲学体系において「根源悪」そして『宗教論』が重要な意味を持つということを示すことを目的とする。